第八講　傍線部心情把握問題解法　45分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今日思いがけなく、古い友だちから葉書を受け取った。山の奥の村に移り住んでもう三年になり、再び都会の生活に戻ることもあるまいから住所を知らせておくという、それだけが書いてある葉書だった。その数行の文句を、一字一字見ているうちに、何という贅沢(ぜいたく)な奴なのだろうと思った。(1)まさか何というずるい奴だとまでは思うわけには行かなかった。

上州の、そこへ行く途中の街道を辿(たど)って行けば、末は道が山へ消えるようにせばまりながら越後へ入ってしまうそのあたりを、私も詳しくはないが知っていた。そして彼の住んでいるという村も、彼とは全く無関係に、もうずいぶん前に訪れたことがある。

私のその友人と、その村とがどういう関係にあるのかは葉書にもひと言も書いてはないし、これまでにそんな話を聞いたこともついぞない。何しろ二十年は会っていないし、その一枚の葉書をいくら睨(にら)んでいたところでそこに書いてある極(ご)く簡単な文句からは何も考えられない。だから彼にし

てみれば山村に移り住んでもう都会には出ないだろうということが、私がついそう思ってしまったように決して贅沢なことなどではないのかも知れない。ただこの葉書は、もう忘れかけていたその山村の秋を私の記憶の中からいやに鮮やかに想い出させる役目はしたことになる。

＊

そういえばあの時、私は何でも栃木県の山ぞいの、丘をほんの一日二日歩くつもりで出かけたのだった。稲刈ももう殆(ほと)んど終わって、束ねた稲が干してあるころだった。景色を眺めるというより秋の空気の匂いを嗅いで歩くのが嬉しかった。二日歩いて夕暮れ時に、そろそろ帰ることも考えなければと思いながら、空の色とそこを並んでゆっくりと通る雲があまり穏やかで、そのまま上州の山麓へと足を向けたのだった。

古いことで泊った場所や宿のことなどは何も想い出せない。まるで放心の状態で歩いていたとしか思えないように、その辺のところは記憶にない。

秋が安らかに草に住む虫たちを鳴かせ、羊のような雲を空に遊ばせておく限り私(2)はこういう旅を続けていたい気持にさせられてしまった。だからこの村に私がやって来て、水車の音をきいたり、農家の納屋に出入りしている鶏たちを見たのは旅に出て幾日目だったのかさっぱり想い出せない。

＊

こうした山麓の旅のあいだには幾つもの集落を通って来た筈（はず）なのに、どうしてこの村だけが、たった一枚の、その村の容子（ようす）などは何一つ書いてない葉書によってこんな工合（ぐあい）に鮮やかに甦（よみがえ）るものなのか。

私は、牛を牽（ひ）いてちょうど自分の家に戻って来た農夫に、多分この村の奥の道がどうなっているかを訊（たず）ねながらほかの話もしているうちに、その家に熟したままかなり残っている柿が急に食べたくなって、三つ四つ売ってもらえないものかと頼んだ。

農夫は、竿（さお）をにぎって柿を少し乱暴にはたき落した。私は黙って見ていることも出来ずに、柿の木の下に走りよって、落ちて来る柿をうけ止めて、もうこれだけで充分だと言った。

柿は枝についている時には、どこにも傷一つなく、一つ一つが大きな酸漿（ほおずき）のように見えていたが、受け取ってみると、あっちこっちに黒いしみだの傷もあった。ところがそれを持って行って食べなさいと言われた時は、(3)なんにも邪気のない、正直で素朴な農夫の心を手のひらに渡されたような気持だった。

＊

点々とある農家のあいだの、まっすぐにはなっていない道の両側には、幅は一尺ほどではあるが流れがあり、豊かな水が方々で音を立てていた。

道も坂だったのだろうが、流れにも勢いがあり、ところどころに野菜や農夫たちの道具を洗うための場所が出来ていて、そういうところでは水は小さい渦をまいていた。

その頃私は、物そのものよりも、色や光の組み合わせによって風景を見て、またそういう印象を強く残そうとしていたためなのか、西に廻(まわ)った太陽からのやわらかな橙(だいだい)色の陽光による、あたり一面の、かすかにほてるような、あるいは恥(はずか)しさのための赤らみのような、その色合が私に何か物語をきかせているようだった。

それは改めて私から人に語れるような筋を持ったものではなく、私をその場所で深く包み込んで行くような物語だった。

＊

上へ登って行けば僅かばかり畑があって山道になると言われたその道を、もちろんいい加減のところで引き返すつもりで登って行くと、誰がそこに据えたものとも思えない、また自然に大昔からそこにあったとも思えない岩を見つけ、それに腰をかけて私は貰(もら)った柿を食べた。

そうしてこの高みから村を見渡して、もしも私がここへ移り住もうという気持を起こしたとしたら、どこへどんな小屋を建てて生活することが許されるのだろうかと考えてみた。

この村はどこに特徴があるというのでもないし、東側から左手で抱き込むように出ている尾根にしても、ところどころに私が腰を下ろしているのと同じような岩が露出しているだけで平凡なものである。だが太陽は秋になると暫くのあいだ、この村が好きで好きでたまらなくなると言った、優しさがこぼれたような光をそそいでいる。

(4)ここは恐らく太陽にとっては秘密の土地であるに違いない。そこに昔ながら住んで土を耕している者たちは、そんなことに気もつかずにいるかも知れない。それを、たまたまここを通り過ぎて行く私が、僅かの憩いの時間だけ、優しく高貴な光を浴びるのを許してもらえたのだろう。

＊

だが、それに有頂天になって、私自身がこの秋の太陽に愛されている土地に移住を企てることは、ここがそうしためぐみを受けているところだけに、その値打を然程(さほど)に知らずに頸(くび)に飾っている宝石をちょっとした簡単な言葉でどこかの島の住人から奪いとるのと似ているような気がした。

この村は秋の、そこに秘かに憩う太陽の愛撫をうけて、貧しさの故に落ちた壁も、古さの故に倒れかけた納屋も、労働のために褐色にやけた人々の顔も、過不足のない調和の中で静かな息づかいをしていて、(5)私が住む場所は勿論(もちろん)のこと、休息の場所さえ見当りにくいところだった。

葉書をくれた友人はこういう村に今住んでいる。　（一九六二年九月）

（串田孫一「山村の秋」による）

問一　傍線部（1）はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部（2）はどのような「旅」か、説明せよ。

問三　傍線部（3）のように筆者が感じたのはなぜか、説明せよ。

問四　傍線部（4）のように筆者が思ったのはなぜか、説明せよ。

問五　傍線部（5）のように筆者が思ったのはなぜか、説明せよ。

問一

問二

問三

問四

問五

第八講　傍線部心情把握問題解法　解答

問一

友人の葉書から、かつて訪れた太陽の恵みを受ける村を思い出し、そこに住む友人を贅沢だと思う一方、自分がその村の太陽の恵みを受けるのは村の住人に申し訳ないと思っていたため、自分がその村に住みたいとは思わなかったということ。

問二

丘を一日二日歩くつもりという目的があったのだが、秋の風物と一体となり逍遥しているうちに本来の目的や意識を忘れ、細かい部分は記憶にも残らなかったような旅。

問三

柿を売ってもらえないかと頼んだところ、農夫が乱暴に柿をはたき落とし、その柿にしみや傷があって落胆していたが、持って行って食べなさいと言われて、売るのではなくくれたのだとわかったから。

問四

太陽はやわらかな橙色の陽光で照らしてくれて、都会から来た私は優しく包まれるような感覚になったが、そこに昔ながら住んで土を耕している者たちはその陽光の貴重さに気が付かずにいるのかもしれないと思ったから。

問五

秋の太陽の恵みを受ける村で私が住んだり休息したりすると、そこで陽光の価値に気が付かずにつつましい生活をしている者たちよりも恵みを受けることになってしまい、昔ながらの住人たちに申し訳なく思ってしまったから。